温根開拓地への追憶

（戦後開拓）

『温根』の戦後開拓地は、通称『神奈川部落』と言われていた。

昭和二〇年及び二一年にかけて、戦時中の大都市からの疎開者、樺太等海外からの引き揚げ者又は、終戦のための復員者等含めた人達で、未墾地の開拓が始まり、神奈川部落は特に内地からの集団入植者多いため、北海道の気候風土になかなか馴れず、良く耐えぬいたものでした。

私は、一年遅れて昭和二一年に、現地入りをしたが、入植の時点では、入植地は無かったが、当時は、母村佐呂間との分村前なので、佐呂間村役場の管轄下にあり、拓殖担当の上高氏には、大変お世話になった。

離農者が決っているので、暫く待期をしていてくれる様とのことで、元共和部落と開拓地の間に営林署の飯場があったので、そこで半月余り暮すことになった。

私は、十勝の大樹で三・四年開拓の実習をしており、佐呂間村は初めてなので、あの広々とした十勝平野からいきなり、佐呂間の駅頭に降り立ったとき、がく然とした。山肌が眼の前に見え、狭い山間の町の感じで、まるで箱庭の中に降りた様な気がしたが、この辺でよいのかと思うと、拓殖の上高氏が、『まだまだ』という。情なくなってしまった。漸く着した所が、上佐呂間市街から三キロの地点の近藤甚助さん宅、ここの小屋を借りて又暫くでこぼこの馬車道を山に向って又三キロ位、その時は心細くなってしまった。

そこが共和部落で、一二・三戸の既存農家が続いていて、その外れに目指す営林署の飯場があって、開拓者のバラック住宅が、一ケ所に立ち並んでいる。開拓地に到着したのだった。

これから開拓する所だから、畑らしきものは見当らず、熊笹と、造材後の抜根しか見えない『あ然』とした。重箱に閉じ込められて蓋をされた様な胸苦しさを覚え、暫くホームシックに悩まされた。

神奈川部落と言うので、神奈川県の人達ばかりかと思ったが、東京、大阪の人々もいる。早速挨拶廻り、余りの粗末な建物にはびっくり、中に入ると、すき間風を防ぐために、新聞紙が貼られ、屋根は所々空が見える。よく一冬を

過したものだと感心をする。

団長の清水一隆さんに案内され各戸を回る。大体の家族構成を知った。間もなく丸山さんが離農したので、私の入植地が決ったのだったが、只一面の伐採後地で、地勢も境界も判らない。図面を見せてもらったら、温根山を囲んで短冊型に分筆されている。間口が五〇間、奥行が三〇〇間、五町歩づつに区割りがされているが、各人共に、熊笹と抜根にはばまれて、家の周囲に一・二畝位の開墾が成されてはいたが、殆んど畑と言う程の状態ではない。

早速、開墾の準備にかかるが、内地の人達は、全く相談相手にはならないが、一応集まって貰い焼畑の準備にかかる。笹刈鎌とレーキで火防線を切り、火防線は、平均巾六・七メートル位は必要なのだが、半分が漸くという人もいたが、どうにかスタンバイも終る。

営林署の許可も得て、雨天を待って、近接部落の人々の応援も得て火入をしたが、火が余って、国有林を少し焼いた。火入れが終って見通しがよくなったら、各戸の地勢と境界が明らかになった。

いよいよ、島田鍬での開墾が始まった。馴れないながらも、内地からの人達もよく働いた。二年目には、平均一町歩余りを開墾し、食糧の確保のために、ソバを蒔き南瓜・トーモロコシ・馬鈴薯等を作付けされた。

皆命がけなのだから、その上に開墾補助金が、開墾反別によって貰うえるので、真っ黒になって働いた。掌に豆が出来る。それが潰れる、鍬持つ手がそれで痛い。雨が降っても鍬振る日もあって、熟畑が広がるに喜びも感じながら、火薬抜根が導入され、手に負えぬ大木の抜根を除いたときは、開拓の張り合いを感じました。

七割位熟畑が出来た頃から、現金収入のための、販売作物も作付されるようになって、既存農家らしくなりかけるころ、レキトーザーの導入で耕地が尚広がったが、表土をめくり、沢を埋め、余りは廃耕線として積み上げられたが、今にして思えば、あのレキトーザーによる表土はもったいないものだった。

四〇数年後の今日、尚肥沃土の焼畑に依る灰分の流失。年々の作付の収穫による。作土の酸性化、肥料分の減少等の心配されるようになった頃に、酪農を取り入れ営農改善と共に、有機質の供給が進み、作物の収益も上昇されるようになった。

温根地区の神奈川部落の、開拓の経過報告はこの位にしまして、

佐呂間町郷土研究会からの、折角の御依頼だが、何しろ私は、農家になって、文章書く機会が余りなかったので、書くそのものの良し悪しが判りません、その点お許しを。

少し文章が長くなりますが、この際なので温根地区の思い出を、少し記します。

開拓の当初、地区の中での、手間替えとか道路直しなどの出役、共にした人々の氏名を考えれば、懐かしい思い出は尽きないが、一人一人を書き綴るには、余りにも多過ぎるのですが、特にこの地区のこの人はと言う人は、先づ、一番奥から、山口定丸・渡辺友吉・市原喜一郎・長縄　秀・樽木幹雄・中島　巌・脇谷　博・柳川　博・清水一隆・吉田三四郎・河野　某の一一戸が入植、漸次離農し、柳川博氏の後には、樺太引揚の小笠原利雄君が入り、丸山某の後には私、河野氏の後には地元の加藤秀義君が入植したが、残った私と小笠原利作君と、加藤秀義君の三戸に、離農者の土地を増反地に与えられたが、加藤秀義君は気の毒にも間もなく盲腸を患って、内臓癒着等の併発一〇年余りの闘病の後ついに、亡くなってしまった。

戦後開拓も、佐呂間町開基百年が平成六年に来る年に、昭和二〇年に神奈川部落は発足しているので五〇年半世紀経ちました。ここに、私に書く機会を与えられついでに、エピソードを二・三紹介残したいと思います。

昭和二〇年入植の山口定丸さんは、あのころ四〇代であったと思うが、七〇歳位に見え背中を丸めて一反風呂敷を首に巻き、物の配給時代の、特配防寒靴を、夏でも履いていて上佐呂間市街はおろか、何処にでも出かけ、特に近眼が物凄い、道を歩いていても遠くから、あっ山口さんだとすぐ判る程の特徴のある人であった。すれ違うとき通り過ぎてから

「こんにちは」と言う程の人であった。この山口さんの体や性質を言いたいのでなく。

実は、この山口さんが将棋板の前に座るとまるでしゃんとして、あの近眼で板上の駒がはっきり見えて。将棋の試合をして、私の知っている限りでは、山口秀義さんに勝つ人はなかった。ある冬の日、松木さん宅で、将棋の勝抜きをしたときも、相手になる人を全部負かしてしまった記憶がある。

清水一隆さんも変った人だった。この人も昭和二〇年の入植の人で、緬羊五頭と山羊を二頭飼っていた。

七頭の緬羊と山羊を、山の中に五畝程の牧草地を作り、そこに杭を打って、繋ぎ飼いをしていた。清水さんの言っていることが面白かったが、後で猶面白いより気の毒だった。

『役場の人に見られたら税金かけられるから、見えないところに置いて飼っているんだ。こう言うことでは、奥地の者の特権だね』と言って、そのことを自慢していたが、或る日のこと、長男の精一君がいつもの通り、繋ぎ替えに行って、腰を抜かさんばかりの姿で帰って来て、「父ちゃん父ちゃん、緬羊が死んでしまっているよ」と叫びながら帰って来た。

佐呂間市街の警察部長さんところに連絡し、警察まで動員して近所の人も四・五人応援して行って見たら、緬羊は五頭全部背骨を折られて、腹を喰いちぎられていた。山羊は見当らない。

そこで熊の仕業だと判った。大岩さんや青野さんから聞いたことだが、あの日、熊が白い物喰わえて、国道を横切って行ったの見たとのこと。

北海道に熊がいる話は聞いていたが、自分の住んでいる近くで、こんな獰猛なことの現実を目にしたのには本当に驚いた。このお陰でもって、若者の毎夜続いていた夜遊びが、ぷつりとなくなった。

次いで忘れられないのが、渡辺友吉さんである。或る晩統計の調査で、渡辺さん宅にお邪魔した。「今晩は」と中に入ると、異常にアンモニアの臭いがする。扱取りでもしたのかと思い、暫く我慢して座っていたが、余りの臭いなので、「大分臭うね」と言ったらおばさんが、庭のリンゴ箱二・三個積んであるのを指さして、「父ちゃんの作品よ」と笑う。蓋を開けて驚いた。串団子位に丸めた人糞を、木灰で固めてそれぞれの箱にいっぱい入っているではないか。

何に使用するかも聞かずに早々に退散したが、後で聞いた話では、南瓜は豊作だったが、大豆其の他は、莖葉ばかり徒長して実が成らなかったとか。渡部友吉さんは、人糞の肥料としての使い方を誰から教わったのだろうと、今でも考えさせられる。

特筆事項がまだあります。実名省きます。

Y34氏の長男H君、親達は早く大阪に帰ったが、H君に若佐のNさんところの養女が嫁いで来ていた。子供が二人生れていたのだったが、嫁さんが段々と病弱になって、H君も営農が苦しくなって来ていた。

親が大阪に引き揚げるまでに畑を開墾してあった。H君のところにある晩私が用があって訪れた。「今晩は」と声をかけて、中に入る。入る途端何やら頬に冷たい物が、ざらっと触ったが、私は、嫁さんが体具合悪い時だし、子供が小さいから「おしめ」でも干してあるのだろうとの位の考えで。中に入ったのだった。今私がH君宅を訪れた意の話も終らせて、帰るため部屋を出ようとしたら、H君は、入口までの土間が暗かろうと、気使って石油ランプを持って、入口ある土間を照してくれた。

ああーっうーー

青大将の皮をむいたのが沢山ぶら下げられていた。ゆっくりおいしいお茶を御馳走になって、今日の用件もスムーズに終っての帰りぎわ、途端の目の前の突然の異様な風景、だがこれを読んで下さる方々に、これからの私の文章を見て下さい。

開拓者の病人が出た。貧者のつらさ。

H君の嫁さんが、子供を二人生み育てるうちに、医者にかかれない経済力の家庭では、誰れ言うともなく、病弱の体力恢後のためには、蛇を喰ったら薬にもなるし、精力もつくからとの言い伝えがあった。私はそのことは後で知ったが、H君は、わが妻の病弱の体を丈夫にしてやろうとの執念が、我が家を訪れる人の気持まで考えが及ばなかったのでないかと。この原稿書きながら、当時の時間の流れの中の、神川部落をいろいろな角度で考え

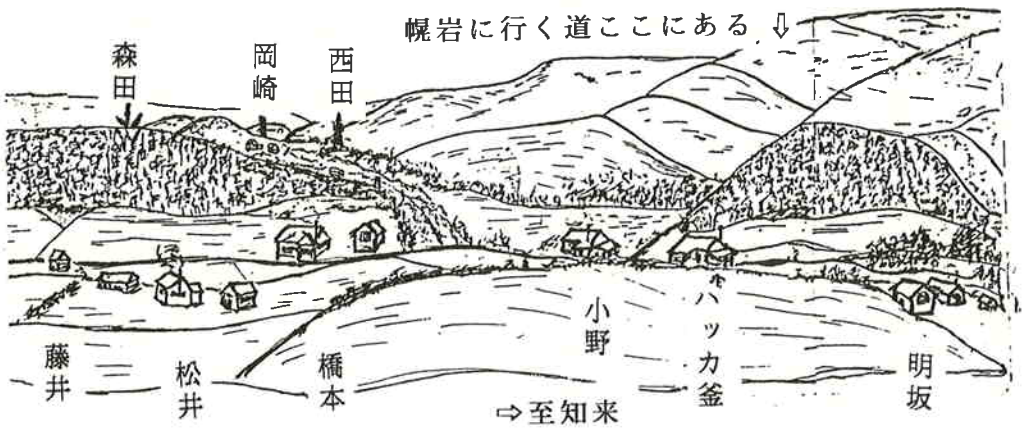
させられる。
神奈川部落も、半世紀の経過と共にくるくると、変転・転回、去って行ったまま、音信がない人が多いままに。私はやはり去った人々に対して、今頃は何をして暮らしているだろうなあと思い出す。
そうして、神奈川部落の名称も消えてしまった。年月の経過の結果は、現在の経営の類型の酪農を選択して、生活の安定を、不充分ながらも得ている。
私の、この地に於ての出発は、生活も農法も原始的であった。年々脱皮に脱皮をし、地域の栄の郷土に融合を果し得た。其の基本的な条件は、農道の開削。ラジオの共同聴取によるラジオとか、他の組合の人々との交流の巾を拡げ、電気施設の導入するうちに。テレビが普及等に文化の向上について来た。
今では、開拓者又は疎開者などの呼び名もいつの間にか、過去へ消え消え去って仕舞った。

平成五年一一月二四日
文責　長縄　秀

消滅した尚和農事組合
（戦後開拓）

知来小学校の少し下手に、下に向って左側に知来川が流れている。知来川は、本当に狭い沢の中五粁以上の長さがある。この川添えに一本の道路が曲りくねってついている。この道路は、峠を越えて下ったところが、富武小学校の少し下手の所に至っている。
その、富武と知来の中間に、戦後出来て消滅の尚和農事組合があった、戦後の開拓者が、国有林の原始林を伐り拓いて、一九七〇年の元旦にこの呼称が消えて、知来中央組合（非農家の）に合併された。
昭和の時代の、昭和二〇年から、昭和四九年一二月三一日までと言ったら、昭和時代が六四年で終っているので、昭和の年数の約半分が、昭和の年代の真中ごろに、尚和があって、現在は、奥地に向って、右半分が、町営牧場となって、尚和の名が残っている。
尚和の始まりは、第二次世界大戦に出征していた佐呂間町内の、敗戦で復員して来た人達の中から選ばれて、国有林を開拓に拂い下げた地域で、尚和と名付けられるまで、復員部落と呼ばれていた。
以後西暦を使わず、昭和の年数を使って書いて行きましょう。
何しろ特殊地帯の山間地域、昭和二〇年一二月一日に役場に於て、復員者の中から、産業課で一二名選ばれた。それは奥地の方のみで、下の方現在矢吹氏が、入植したときのまま生活しているところは、知来地区の方に編入されたのだったが、農事実行組合を昭和二二年一二月になって、役場の方から設立を促

戦後開拓の復員部落と一時言われた尚和最盛期の頃の姿です



がされ、昭和二二年正月に入植者の総会に、役場の要望により、農事実行組合の設立を決めて、名称を「尚和」としたのであった。

その話を聞いた、門崎氏、下の方一戸入植していたが、戦後の開拓者ばかりの実行組合の方が、何かと都合がよいので、既存の知来の方の実行組合に入らず、奥地の尚和の仲間に入った。その前例によって、後から入植した二戸も、奥の仲間になった。

そう言う経緯から見たら、奥地の尚和の農行組合は、昭和五〇年元旦で消滅したことになったことになる。非農家も五戸程多いときは在住していて、総戸数一七戸になったことがあった。

営農が軌道に乗っても、佐呂間町が営農の奨励に採り入れている、酪農を経営の中にと考えたが、昭和三〇年代に入っても、尚和には牛乳集荷のトラックは、枝道として、余りにも奥地だというので、入らないと通告を受け、酪農には見切りをつけてしまった。

交通関係が不便なのと、電気、電話施設もそのようなことで仲々つかず、それでもラジオの共同聴取施設が、戦後全国的に農村地帯に出来始めた頃、佐呂間町も昭和二四年に、全町的に普及された翌年の、昭和二五年一月にラジオの共同聴取施設を完成させた。

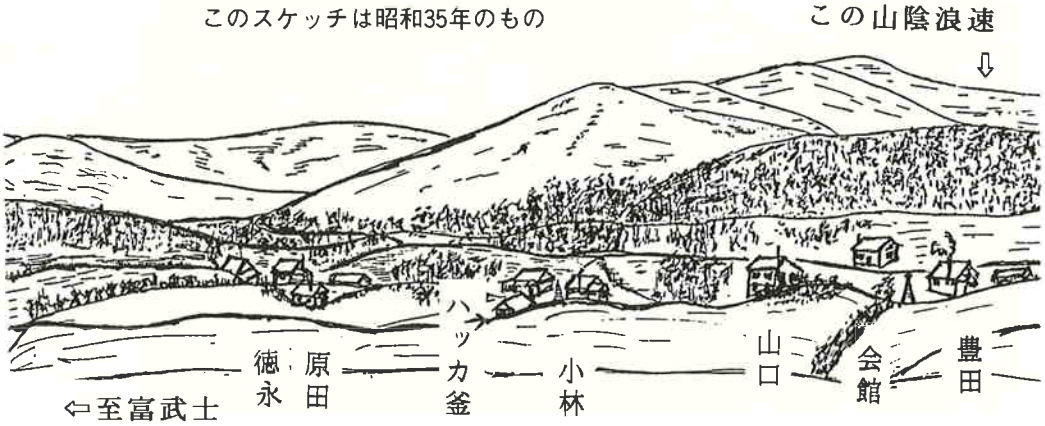
その昭和二五年から離農者が、ぽつりぽつりと出始め、又入植者もぽつりぽつりとあって、最高戸数のとき農家一二戸、非農家五戸合計一七戸で、昭和三二年のときは、小中学生合せて二八名ということもあった。

昭和三〇年代に入って、日本経済は大きく発展し、昭和三五年、日本国民の所得倍増論を唱えて、池田内閣が出来たころから、日本農業は他の産業に押されてしまい、特に戦後の開拓の尚和地域の人も苦しくなった。

昭和三八年に、政府は、戦後の開拓者に、離農奨励金四五万円を出して、離農を勧めることになった翌年、奥地の方は、三戸を残した外の者は、離農の手続きを始めて、その翌年の昭和四〇年三月に、その人達は尚和を去った。非農家の五戸も、それと前後して尚和を去った。

残ったのは奥の三戸と、下の三戸で農事組合を維持はしていたが、昭和四四年頃から、その六戸も兼業農家となり、農業収入より兼業収入の方が多くなった。事業するに丁度よく昭和四二年秋から、尚和地域の入口のところに、佐呂間砕石工場が出来たことも、職場として丁度よかったこともあった。

大半がいなくなってから、営林署の方で尚和道路に一七個所あった木橋を、コンクリートの橋に取替え、道路にはバラスを年々厚く敷いて道路がよくなったころ。昭和四〇年代は、知来方面の、営農の規模確大した農家が尚和の奥地の畑を、貸してくれとか、売ってくれとか言われるようになって、昭和五〇年代に、残っていた六戸は、畑を売る者は売って永久に貸す者は貸して、農家という形はなくなった。



昭和五〇年元旦から、非農家の知来市街の中央組合に編入、昭和二〇年一二月入植者の人員と氏名を役場で決定してから、約三〇年にして、尚和農事実行組合は消滅した。

そのような経過の中で、昭和三八年に、全戸に風力発電が施設された。だが半数の家は風当り悪く役に立たなかった。

昭和四一年に、残っていた六戸に水導施設が完成している。昭和五〇年代に入ったときは、奥に一戸、下に二戸となったが、

昭和四四年、町の七割補助で、ジーゼルエンジンの発電気が全戸に施設されて、洗濯機を使い、テレビを見ることが出来るようになった。

尚和農事組合が消滅した年、昭和五〇年一二月に下の二戸に北電の電気施設が出来た。

昭和五五年一月に、奥の一戸も含めて残っている三戸に、国の電話施設皆無にする施策によって、とうとう電話施設が出来た。

昭和五八年に下の一戸去り。昭和六一年に奥の一戸も去って、尚和として発足したところには、現在一戸もなくなり、そこの右半分が、佐呂間一の町営の尚和牧場があるのみ。

尚和農事実行組合は、今私が考えるには、時代の流れの中で生きると言うことのため、あの第二次世界大戦に刈り出された兵士が、喰うための働き場所の、一時凌ぎの場所だったが、大半の者が尚和を、離農資金を貰って去って行ったことも、日本の国の発展の裏側の状影だったかとも思う。（昭和四〇年）

当時の同志であった人達が、もう夫婦共々故人となったのが四組、片方が故人となったのが五人、戦後五〇年当時二〇代、三〇代の若者の、行く年月の流れの中の歴史でした。

文責　徳永　良行

この写真は、昭和50年に消滅した元知来に有った「和尚農事実行組合」の全員そろった写真である。昭和28年６月19日に撮影されたもの、前日に、親子連れ３頭撃ち取った記念の写真であるが、女子供を含めて農事組合全員の、消滅した地域の貴重なもの。